中学校での多読指導実践が及ぼす影響に関する一考察

A Study on Some Affcets of Extensive Reading in an English Elective Class in a Junior High School

(2006年３月31日受理)

佐藤　大介　　橋内　幸子
Daisuke Satoh　　Sachiko Hashiuchi

Key words：多読指導，生徒意識，速読力，定期試験，改善点

要　　旨

本調査では，中学２年生21名を対象に洋書冊数230冊を用意して，選択授業（発展型）で10回の多読授業を実施した。授業では「多読三原則」だけを指示し，受講した生徒には自由に洋書を手に取り読書を進めてもらった。

調査方法として，生徒の意識への影響をアンケート調査から，速読力への影響を毎回授業時に測定したWPMから，英語力への影響を定期試験結果からそれぞれ検証を行った。

その結果，多読授業に取り組む前の生徒意識は，「英語力強化」と「読書習慣・文学鑑賞」を主な目的としていた。実際10回の授業後，生徒はReadingスキルの伸長や，読書を通しての忍耐力・集中力・読書習慣が付いたと感じている。しかしながら，速読力については伸びていると感じていた生徒が多かったのに対し，WPMの測定結果からは大きな伸びは読み取ることができなかった。定期試験への影響に関しては，本講座を受けた生徒には有意な伸びが見られた。

このような結果と生徒の感想を元に，より良い多読授業に向けての方法を，教材，教室環境，指導の3点から一提案を行う。

1．は　じ　め　に

中学校や高等学校の英語科では実践的コミュニケーション能力の育成に重点が置かれ，授業では多くのコミュニケーション活動が行われるようになってきた。しかし，その反面英語の授業時数は減少し，その中で受験対策も行いながら，より多くの“authentic”な英語を生徒に感じ取ってもらうためには，授業だけでは不十分となっている。

さて，昨年，筆者は書店で広く並べられていた多読授業に関する図書が気になり，手に取って読んでみた。とても今までの英語の授業の常識を覆す事柄が多く含まれ，とても驚愕した。しかし，中学生がもしこの多読授業を楽しみ，たくさんの英語に触れられれば，彼らの英語力はさらに伸びるのではないかと感じたのである。不十分なinputのままでoutputをさせてしまっている現状を踏まえ，多読授業を実施することにより，input量を増し生徒のoutputへの助けとなるのではないかと期待し，取り組むことを決心した。

そこで，本調査では，中学校における選択授業での多読授業実践で，生徒の開始時と終了時の意識を調査するとともに，多読がもたらすReadingにおける読む速さへの影響及び定期試験での結果に及ぼす影響を検討したい。

また，授業実践を通して，様々な改善点も多くあった。そういった点に関しても，本論で述べたい。

2．調　査　方　法

2．1　対　　象

筆者が非常勤講師として勤務している岡山市内のA中学校で，選択授業（10時間）を受講した２年生21名を調査対象とした。本校では，選択授業を前期・後期に2つずつ行い，それぞれが「補充型」と「発展型」に分けられている。「補充型」では，苦手な分野を基礎からじっくりやり直すこと等ができるよう設定されており，「発展型」では，通常の授業ではできない発展的は活動を得意分野において挑戦し，さらに学習を深めるよう設定されている。

本調査は後期選択授業の発展型の生徒であるため，英語学習に対する関心・意欲・態度は高いものの，必ずしも英語が得意という生徒ばかりではなかった。なお，本講座を選択した21名の内，20名は第1希望としており，１名だけが第２希望であった。

2．2　教　　材

多読授業を展開するために，まず，多読用の洋書を量的に整える手立てを行った。

本校の図書館に蔵書している洋書を調べてみると，次のような83冊があった。

◇	A Little Golden Book	46冊
◇	南雲堂レディバード・リーダーズ	14冊
◇	復刻　世界の絵本館（オズボーン・コレクション）	16冊
◇	その他	７冊
	合　　計	83冊

しかしこれらの蔵書はどれも古く，また生徒が実際に興味を持って積極的に楽しみながら読むには不十分であった。そこで新たに洋書を購入することとした。

洋書の冊数については，酒井ら(2005)を参考に，本学の図書費予算を考慮しながら，購入した。冊数は，21名の生徒が毎回５冊手にしても可能な量，つまり，21（名）×５（冊）＝110冊は新規に用意しようと考えた。

そこで安価でまとめて購入することができたOxfordのGraded Readersを101冊購入した。またレベルについては，中学校2年生程度のものと考え，Classic Tales Beginner 1, 2, Classic Tales Elementary 1, 2, 3, Oxford Bookworms Library 1, 2, Oxford Bookworms Starters, Oxford Reading Tree Stage 1, 1+, 2, 3, 4, 5, 6, 7を選んだ。

この結果，本校の洋書蔵書数は184冊となった。また，生徒自身にも洋書を自宅で積極的に読んでもらうため，本講座を選択した生徒には，インターネット（Amazon）やパンフレット（Oxford Graded Readers, Penguin Readers, Macmillan）から好きな洋書を各自最低2冊ずつ購入してもらい(筆者がまとめて注文)，しばらくの間，授業にも持参してきてもらうことで，授業時の洋書数は46冊増え，結果230冊となった。

なお，これら洋書については，後期の選択授業期間は，英語科で管理し，一般貸出等は行わなかった。

2．3　授業展開

選択授業の名前を「英語を実体感！多読ワールド」とし，選択授業の全体オリエンテーションでは，「楽しく」「継続的に」「大量に」をキーワードに洋書を読み進めていくことを強調した。また，授業では，「多読三原則」（辞書は引かない・わからないところは飛ばす・進まなくなったらやめる）を取り入れ，授業を行った。

2．4　手続き

本調査では，生徒自身の意識を検証するために，初回の授業時に各自目標設定をして行い，選択理由や自己課題について記入してもらった。さらに最終回では，生徒自身が感じた伸長した力や感想を記入してもらうと同時に，本講座についてのアンケート調査を実施した。

また，速読力への影響を見るために，毎回授業の終わりに，１分間の黙読によるWPMを測定し記録した。

さらに，定期試験における成績への影響を調査するために，前期の期末試験と後期の学年末試験の各観点別得点（関心・意欲・態度は除く）と合計点を用い，統計的処理を行った。なお，両試験共に，作成したのは筆者以外の別の英語科教師である。

3．調査結果と考察

3．1　選択した生徒の意識

まずは生徒に本講座の選択理由を自由記述で記入してもらった。その理由として，もっとも多かったのは，「語

彙を増やしたい」,「長文を読み取る力を付けたい」,「英文をスラスラ読めるようになりたい」といった英語力伸長を理由としている生徒であった（11名)。また,「独りで洋書を読めるようになりたい，または，読んでみたい」や「本を読むことが好きなので，英語で書かれた本も楽しんでみたい」といった読書鑑賞が好きな生徒も多くいた（９名)。他には,「英語話者の実際の表現にも触れてみたい」（３名）や「英語に対する苦手意識の克服」（２名）なども選択理由に含まれていた。

また，本講座での自己課題設定においては，語彙力，読解力（推測力を含む)，速読力，表現力などの英語力を設定した生徒が多くいた（12名)。他にも，洋書を読むことに対しての習慣を身に付けたり，読書による集中力や忍耐力を身に付けたいと思っている生徒（６名）や，英語に対する苦手意識の克服や興味・関心を強めると設定した生徒（３名)，辞書を引かないで読むようにしたいと感じている生徒もいた（２名)。

この結果は，選択授業の全体オリエンテーションにおける指導が強く働き，また選択に際して事前に配布している学習概要の書かれた資料が大きな影響を与えているのは明確であるが，本講座を進めていく中で，生徒自身が求めているものは大きく分けると,「英語力強化」と「読書習慣・文学鑑賞」の２点であることがよく分かる。

３．２　講座を終えた生徒の意識

10回の講座の終わりに，生徒自身が感じた伸長した力に関して自由記述で記入してもらった。その結果，21名中14名が，速読力が伸びたと感じていた。また，前項で挙げた読解力は21名中７名が，推測力も同様に21名中7名がそれぞれ伸びたと感じていた。しかしながら，語彙や表現力については，あまり伸びているという実感は持っていないようである。また，読書を授業中に行うことで，忍耐力や集中力，読書習慣がついたと感じている生徒は５名いた。英語に対する興味・関心が増したと答えた生徒も２名いた。

本講座で初回に設定した課題を達成するために取った手段に関しても記入もらった。その方法は十人十色ではあったが，とにかくたくさん読むということに努力したようである。その際にも，辞書を使わずに語彙をできる限り推測しながら読んでいったり，簡単なほうから難しい本に段階的に移行させていく方法や，分からない部分を何度も読み直したり，さらには，予め別の手段（インターネットや和書）で概要を把握してから読み始めるなど，生徒自身が最適な手段を考えながら，多読を進めていっていた。中には辞書を片手に和訳をずっと行っている生徒もいた。

この結果から，10回の多読授業において生徒たちは，Readingに関するスキルが伸びていると実感していることが分かる。その伸ばし方については，自分自身で考えることが重要であるようだ。さらに，洋書を読み進めることで忍耐力や集中力，読書習慣も身に付いたと感じていることは，生徒の要求を満たしていると考えることができる。

３．３　速読力への影響

速読力の伸長を調査するために，毎回の授業終了時にWPMを測定した。今回のWPMの測定は1分間とし，授業時の読書時と同様黙読による方法を取った。測定に用いる教材は，それぞれ授業中に読み進めていた図書を用い，測定の関係上必ず100語以上のものを使用するように指導した。

図１は，WPM測定結果の平均値をグラフで示したものである。

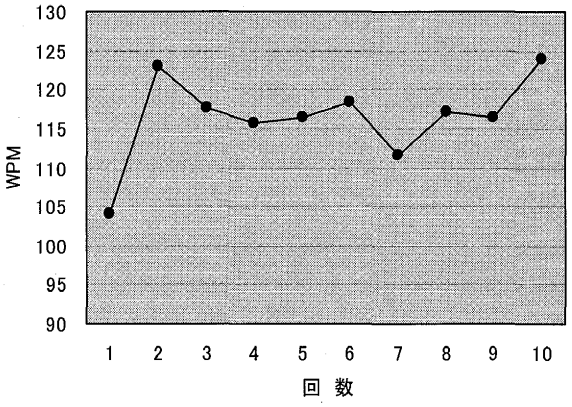

図１　WPM測定結果の平均値

図１の結果を見ると，１回目より10回目の方が，WPMが増していることが分かる。しかし，１回目はWPMの測定に不慣れということもあり，少数であることは想定内であった。またこのような増減が測定に用いている図書によって異なってしまうことも考えられる。よって２回

目以降を比較すると，さほど有意な差はないと言える。この結果は３．２で述べた生徒自身，速読力が上がったと感じている点との関連を考えると，授業中にこのような測定を行っていたのはWPMのみであり，他の点については実感することができなかったのではないだろうか。

３．４　定期試験における成績への影響

生徒が本講座に求めているものの大きな目的の１つが，当然の事ながら，英語力の強化である。この点を検証するために，本講座を受講した21名を実験群として，筆者以外の本校英語科教師作成の前期期末試験と後期学年末試験における平均値の差を有意水準５％で両側検定のｔ検定により検討した。また，本講座を受講していない本校２年生全員を統制群として同試験の平均の差もｔ検定により検討した。その結果が表１である。

表１　実験群と統制群のｔ検定結果

	前期		後期			
	M	SD	M	SD	*df*	*t*
実験群	67.5	19.9	74.3	19.7	20	-3.1**
統制群	59.4	22.0	63.9	22.3	174	-4.7

$^{*}p<.05$,　$^{**}p<.001$

表１が示すように，統制群の試験間の平均の差が有意でないのに対し，実験群の試験間の結果には有意差があった。また実験群の試験間における観点別の検定結果が表２に，統制群の観点別の検定結果を表３に示す。

表２　実験群の観点別のｔ検定結果

	前期		後期			
	M	SD	M	SD	*df*	*t*
表現	7.0	2.8	6.2	3.6	20	1.3
理解	42.6	12.8	47.1	11.2	20	-2.9**
言文	17.9	6.5	21.6	6.5	20	-4.0**

$^{*}p<.05$,　$^{**}p<.001$

表３　統制群の観点別のｔ検定結果

	前期		後期			
	M	SD	M	SD	*df*	*t*
表現	6.6	3.0	5.6	3.5	174	3.4**
理解	37.5	14.1	39.0	14.0	174	-2.1*
言文	15.4	7.5	20.4	7.7	174	-9.9

$^{*}p<.05$,　$^{**}p<.001$

表２，表３より，「表現の能力」の観点では，統制群に見られる有意差が，平均点は学年全体よりも高いものの実験群では見られないという結果となった。しかし，「理解の能力」の観点においては統制群よりも実験群の方がより有意な差があり，「言語や文化についての知識・理解」では，実験群に見られる有意差が，統制群では見られなかった。

また，試験ごとの各群の得点の差を，マン・ホイットニー検定によって検討した。その結果，前期試験では，U=1465.500，p =.13，n.s.であり，有意な差はなかった。それに対して，後期試験では，U=1274.500，p ＜.05であり，有意な差があるという結果となった。

これらの結果が示すように，多読を行うことで，英語力強化の一因となるのは明らかなようである。また，「理解の能力」により有意な差があることから，３．２で述べたように生徒自身も実感している読解力や推測力が高まったと言えよう。しかし表現や語彙に関してはあまり肯定的な感想を抱いていないという点で，試験間での有意差がなかった「表現の能力」から読み取ることができる。また「言語や文化についての知識・理解」についても有意な差が出ていることから，input量が他の生徒よりも多かったことによりintakeが起こっていると考えられる。

４．より良い多読授業に向けて

多読授業を半期10回に渡り実施し，その中で生徒から多くの感想や改善点が寄せられた。それらを元に，より良い多読授業を作り上げるための一提案をする。

4．1　教材の充実

今回受講した生徒にアンケート調査を行ったところ，この半期間で読んだ冊数は，授業内が平均27.0冊（1回当たりの2.7冊），自宅または授業外が1.7冊，合計平均が27.4冊となった。冊数に関しては，今回は常に生徒全体に十分に行き渡るだけの量は確保できていたように感じる。

今回は230冊の洋書を用意したが，生徒が読んだほとんどがOxfordのGraded Readersシリーズであった。その中でも，特に生徒が手に取り読んだのは，Oxford Bookworms Startersであった。その理由として挙げられるのは，当レベルには，中学2年生で既習の文法事項で構成されており，また，Comic Strip, Narrative, Interactiveの3つの形式が用意されており，その中でもマンガ感覚で楽しみながら読めるComic Strip形式のものや，物語の展開を自分で選択肢を選びながら進めていくゲーム感覚のInteractive形式のものが生徒には特に人気があり，毎回楽しみにして授業に臨んでいた。この形式の図書を増やすことを望む声もあった。しかし，Bookworms Library 3については難しいと感じている生徒が多かったが，Library 2は中学2年時に学習する項目も多く含まれており，このような点から，Library 3にチャレンジすることを楽しんでいる生徒もいた。同様に，難しいレベルの図書を読むことで，自分のレベルを知るといった生徒もいた。

また，Classic Talesシリーズでは，知っている物語やおとぎ話が多く，とても馴染みやすかったようである。これらの本を手始めに，多読をスタートさせていた。Reading Treeシリーズは，易しいものからとにかく多く読もうと数冊手に取り，席に戻っては友だち同士で絵を見ては笑いながら，それでも未知語について，協力しながら絵から意味を見つけようとがんばっている姿があった。

Oxfordシリーズのレベルと読書数の関係は表4である。この結果から中学2年生程度で用意するべきレベルがおおまかに把握できる。

表4　シリーズ・レベルと読書数

シリーズ	読書数
Oxford Reading Tree Stage 1	37
Oxford Reading Tree Stage 1+	33
Oxford Reading Tree Stage 2	39
Oxford Reading Tree Stage 3	45
Oxford Reading Tree Stage 4	44
Oxford Reading Tree Stage 5	43
Oxford Reading Tree Stage 6	16
Oxford Reading Tree Stage 7	27
Classic Tales Beginner 1	45
Classic Tales Beginner 2	30
Classic Tales Elementary 1	18
Classic Tales Elementary 2	10
Classic Tales Elementary 3	10
Oxford Bookworms Starters	52
Oxford Bookworms Library 1	22
Oxford Bookworms Library 2	9
Oxford Bookworms Library 3	4

しかし，実際Oxford Graded Readersシリーズは生徒の意見が反映されて購入したものではない。今回生徒に各自で購入させた大きな理由の1つに，興味・関心が強いものを調べるということも含んでいた。今回生徒が購入したものは次のように分類できる。

【映画】

Apollo 13 (Penguin Level 2)
Babe - A pig in the city (Penguin Level 2)
Charlie and the Chocolate Factory
E.T. Extra Terrestrial (Penguin Level 2)
JAWS (Penguin Level 2)
Men In Black New Edition (Penguin Level 2)
Mr. Bean (Penguin Level 2)
Star Wars: Last Stand on Jabiim
The Lord of the Ring (The Fellowship of the Ring)
The Lord of the Ring (The Return of the King)
The Lord of the Ring (The Two Towers)
The Man in the Iron Mask (Macmillan Beginner)

The Phantom of the Opera (Oxford Bookworms 1)
Troy Stone New Edition (Penguin Easy starter)
The Wizard of Oz (Oxford Bookworms 1)

【マンガ・アニメ】

Case Closed
Dragon Ball

【人気作品】

Charlie and the Great Glass Elevator
Holes (Yearling Newbery)

【パンフレットを読んで】

A Pair of Ghostly hands (Oxford Bookworms 3)
Alice in Wonderland New Edition (Penguin Level 2)
Christmas Carol (Oxford Bookworms 3)
Escape (Oxford Starters)
Lucky Number (Macmillan Starter)
POLICE TV (Oxford Starter)
Sherlock Holmes and the Duke's Son (Oxford Bookworms 1)
Starman (Oxford Starters)
The Goldfish (Oxford Bookworms 3)
The Lost Ship (Macmillan Starter)
The Piano (Oxford Bookworms 2)
Through the Looking-Glass (Oxford Bookworms 3)
Wind in the Willow New Edition (Penguin Level 2)

これら購入した図書は，実際生徒が最後に要望した種類のものとほぼ同様のものである。やはり多くの生徒が映画の原作本やすでに話の展開を知っている本をもっと多く用意すべきだと感じており，また，マンガ本などは全巻集めるとより楽しみながら継続的に読めると多読における意欲を示している。本講座でも授業とは別に個人でHarry Potterを購入して，授業中に読み進めている生徒もいた。また，このような生徒が要望する図書に関しては，重複して購入することも必要であり，もし重複して購入できない場合は，貸し出しを禁止するなどの手立てを考える必要がある。本講座でも，途中まで読んでいた本が次回の授業で別の生徒が先に取っていたため，読むことができなかったという感想もあり，貸し出しなどを行わないのであれば，授業終了時に次回の予約カードを設けてもいいであろう。また，このような問題に対処するために，多読の授業で扱う図書は中学校レベルでは，50ページ以下の図書を多く用意することで，授業中に読みきってしまうことができるということも考えられる。

4．2　教室環境の充実

本講座について，少しでも読書環境を整えることで，生徒がリラックスした形で，多読を進められるよう配慮する必要がある。しかし，ある程度の規律も必要である。今回実施に際しては，前半は席を決めずに行い，後半は席を決めて行った。

席を決めずに行うと，本の内容によってはおもしろいものもあり，生徒同士で盛り上がり，他の読書をしている生徒に迷惑がかかってしまった。しかし，席を決めると，静まりかえり，眠気を誘ってしまっていた（昼食終了後すぐの授業ということもあるが）。それでもアンケートの結果では，多くの生徒が席替えをすることで，読書が捗ったといった感想や１人で読み進めていくことで，今までよりも夢中で集中して読めるようになったといった感想が多くあった。このため，教室環境を整えるためにも席を決めることは必要であるといえる。

また，図書は常に教卓前にレベル別に設置していた。しかし生徒はレベルで図書を選ばず，表紙を見て手に取り，中を数ページめくり絵などから判断して，興味があれば席に戻って読んでいるようであった。よって，本を設置する時は，場所が許せば，表紙が見えるような形で設置すれば，より図書選択が効率よく行えるのではないかと思う。

辞書については，数冊設置しておけばよいと感じた。本講座は，「多読三原則」にあるように，辞書は引かないように指示していた。しかし，最初は辞書に頼ってしまう生徒が数名いたが，最後まで辞書を片手に頼っていたのは１名のみで，他は徐々に辞書を使用しなくなった。あることがマイナスに作用することはないであろうから，数冊置いておくことも必要である。

4．3　指導の充実

本講座では，生徒が読書をする時間にほとんどを費やし

た。それ故，教師の役割は机間巡回を行いながら，個々の生徒がどのような図書に興味を持ち，読み進めているのかを把握し，生徒がわからない箇所や何か相談があれば，それに答えるのみであった。

しかし，「読書を楽しめた」という感想を抱いていた生徒が多い一方で，「退屈さを感じていた」と答えた生徒もいた。ただ，ひたすら黙々と読書をすることの重要性もあるであろうが，時間と時期を見ながら，生徒が選んだ本で読み聞かせを行ったり，生徒自身が読み手となって朗読会を行ったり，または，推薦図書を導入部や感想などを踏まえながら紹介したりなど，様々な活動が考えられる。この他，時々は多読でつまずいた時の解決法をクラス全体で話し合うなどして，様々な方法を知りながら，自分に合った英語学習法を見つけていくなどの活動も取り入れるといいのではないだろうか。

5 おわりに

多読授業を通して，生徒が英語に対しての苦手意識を克服し，さらには，英語を読むことに対して苦を感じなくなっており，また，本研究で示したとおり，定期試験での英語の成績にも効果が見られた。さらに，生徒の感想には,「書店に行った際洋書コーナーも見るようになった」や「来年もこの授業をやってほしい」,「家でもこの多読をすれば英語が伸びそう」などと英語に関して興味・関心が高まったということは，英語教育においてとても意味のあることである。

今後は今回論じたような点をさらに充実させながら，より良い多読授業実践を試み，選択授業といった限定した環境ではなく，図書館と連携しながら，学校全体で取り組みたい。それにより，生徒の英語力が高まれば幸いである。

参考文献

酒井邦秀，太田洋，柴田武史：“めざせ100万語”とは!?—多読は授業で実践できるか—，英語教育（2004）Vol.52 No.12，pp. 8-16

酒井邦秀，神田みなみ：「教室で読む英語100万語—多読授業のすすめ」，大修館書店（2005）

Oxford University Press：
Oxford University Press Japan Graded Readers Website（http://www.oup-readers.jp/students/index_jp.html）